『哀れなマリッツァ』は何を表現しているのか

生命科学科１年　郷原奏波

マリッツァ伯爵令嬢第二幕にて、誤解からたくさんの来客の前で金を捨てるように渡してきたマリッツァを見て、タシロは『哀れなマリッツァ』と呟いている。タシロがマリッツァをそう表現した理由としては、タシロに騙されたと誤解したマリッツァのひどく怒った様子から、それまでに何度も騙されてきた彼女の境遇を想ったところが大きいだろう。しかし、それ以外の事象もこの言葉は表現しているのではないだろうか。

まず、彼女とその友人たちの関係を見てみる。劇中で、マリッツァは自宅に大勢の友人を招いたり、友人に訪ねられたりして楽しんだほか、タシロの叔母ボジェナ侯爵夫人とも知り合いであった。このことから、彼女の交友関係は広く、その関係も悪くはなかったとわかる。しかし、彼らはマリッツァと共にパーティを楽しんでいたが、彼女がわがままを言ったり、約束を忘れたり、衆人環視の中で金を捨てるように渡すことでタシロを侮辱しても、忠告したり諌めたりすることはしなかった。特に三つめの行為は最大級の侮辱であり、オペラ『椿姫』では主人公がヒロインに対してそれを行ったことをきっかけに、エスコート役の男と決闘にまで発展してしまうほどのものだ。それでも彼らがマリッツァを止めることはなかった。こうして見ていくとマリッツァの友人たちは、彼女と共に過ごす時間を楽しむことはあっても、本当に彼女のためを想った行動をとることはなかった。

マリッツァはポプレスク侯爵の出した証拠を鵜呑みにし、タシロを誤解した際の『また１つの心にだまされた』という発言を見るに、他人のことを信用しやすい、あまり疑ってかからない性質であると思われる。そのこともあって、彼女は自分と友人たちの関係を客観的に評価することができなかった。しかし、新しい管理人でマリッツァとの付き合いもまだ短いタシロには、一見マリッツァはたくさんの友人に囲まれて充実しているようでいて、実際には本当に彼女のためを思って行動している人がいないことがわかったのだろう。

その一方で、タシロ自身も友人カール男爵の助言を評価し活用することができなかった。カール男爵はタシロの父親の負債を返済するために資産を売り払うのを手伝うようなよくできた友人であり、タシロがベラ・テレークとして働く理由や父の病気といった、妹リーザに隠してきたことを打ち明けるべきだと忠告している。実際にこの助言に従っていれば、少なくともタシロとリーザの関係については誤解が生まれなかった。マリッツァがタシロを大勢の人の前で侮辱することもなかったかもしれない。つまり、『哀れなマリッツァ』という呟きには、彼女とその友人たちの関係には欠けているものがあるということに加えて、ひとは自分に欠けている点や恵まれている点を自覚できないものだという一般論も表現されていると言えるのではないだろうか。マリッツァとタシロ、それぞれの友人関係を比較

するとそのように考えられる。